

追悼

楠 幸男先生へ 感謝をこめて

同窓会会長 井川 満

昭和40年 学部卒

昭和42年 修士修了

1. 同窓会設立へのご協力

楠 幸男 先生が逝去された。先生の訃報をお嬢さんの希代子さんから伝えられたとき、しばらく声が出なかった。先生のご逝去を心に刻み付けるとともに、京都大学数学教室の歴史に太い区切りがはっきりと引かれたとの感がしみじみとした。

私はうまく言葉に表せないが、旧制大学を卒業された方と新制大学を卒業された方との違いを感じてきた。京都大学数学教室に関していえば、楠先生は、旧制高等学校を卒業し、旧制大学、すなわち帝国大学を卒業された方々のうちの最後の方であった。さらに言えば、先生は第三高等学校から京都帝国大学に入学・卒業し、卒業後は数学教室に教官として残り、定年退職されるまで数学教室に所属し続けられた文字通りの生え抜きであられた。同様のコースを辿られた溝畑茂先生は、楠先生より1年先輩であるが、2002年に逝去された。その後は楠先生は旧制度での数学教室生え抜きの唯一の存在であった。楠先生は、溝畑先生の逝去後19年間、そのような意味での唯一の生え抜きとして在り続けて下さった。

2014年の初めころから、京大数学同窓会設立の動きが顕在化してきて、私はその渦に巻き込まれてしまった。巻き込まれたのちに知ったのであるが、旧制大学数学科卒業生の同窓会は昔から存在していた、2014年頃はその活動は休止してはいたが、設立しようとしている同窓会は旧制と新制の両方の卒業生を含むものであるのが望ましい。その為には、旧制度での数学教室唯一の生え抜きの楠先生のご助力をお願いする以外の方法を私は思付かなかった。

楠先生は、私どもの意図を汲んでご協力くださった。設立活動の世話などは全く不得手な私が、西田吾郎さんの突然の逝去によって、ただ年長者である故に中心に立たざるを得なくなった（同窓会設立記念誌の拙文“同窓会設立経過報告、西田さんを偲びつつ”を参照）のに同情下さったのだろう、私を励まし、無理な願いも受け入れて下さった。先生のお心の表れの一端として次のことを記しておく。

- 設立記念誌に“古い思い出”と題した文を寄稿くださった。先生の第三高等学校から大学での勉学の期間は、先の戦争の最中から敗戦の混乱期に跨る。その学生生活の貴重な記録を書き綴って下さった。
- 数学同窓会設立行事において、懇親会での乾杯の音頭を取って下さった。

まさに楠先生のご助力のお陰で、旧制度と新制度の両方の卒業生を含む形での京大数学同窓会が自然に発足することができた。

2. 厚かましいお願いの数々

2014年6月に銀閣寺の近くの“アートライフみつはし”で先生と希代子さんの絵画展が開かれた。当時教室の事務員であった篠崎さんに連れられて先生の絵を見に行った。このとき初めて先生が絵をお描きになるのを知った。その後、何度か先生のお宅をお訪ねしたおり、部屋に飾ってあるものを始め、幾つもの先生の絵を見せて頂き、また絵に関わるお話を聞かせて頂いた。そのような折、1枚の絵葉書を私にくださり“この絵は何処を描いたか分かるか”とお訊きになった。描かれているドームの付いた建物は私が学生の頃は宇宙物理教室であったこと、および現3号館の北ウイングは私の入学の2、3年前にできたのを知っていたため、“分かります”とお応えした。しかし、描かれている中庭の様子が何かは見当もつかなかった。先生の説明では、敗戦後の食糧不足のため中庭が芋畑になり、その畝の跡が描かれていたのであった。先生のこの絵は数学教室の歴史の敗戦後の様子を表している貴重な記録でもある。

記憶が確かではないが2018年の後半期での同窓会世話役会で先生の絵の話が出たとき、“先生に教室の絵を描いていただけないか”との話が出て、是非お願いしようということになった。絵を描く苦勞など全く知らない者たちの厚かましい話である。しかし、先生はお引き受けくださり、“自分がスケッチに教室まで行くのは難しいので、君が教室の写真を何枚か撮って持ってきてくれ”と言われた。それで私が写真を撮って見て頂いたが、“君の写真はどれも平凡やな！”との評価であった。それで“どの場所をどのようなアングルから撮ればよいでしょうか”と伺うと、2、3カ所のご指示を頂いた。そのご指示に従って写真を撮って持っていくと、“前の写真の中で良さそうなのもとを描いておいた”と言って、既に額縁に入った絵を渡してくださった。頂いた絵には先生のサインと共に2019と書かれている。2019年があけて間の無いことであったような気がする。

絵のお願いとどちらが先であったかはっきりとは思い出せないが、同窓会誌に先生がクーラン研究所に遊学されたときのことを文章にして欲しいとのお願いも殆ど同じ頃にした。この願いもお聞き届けくださり、“初めての外遊をめぐって”の文章をご執筆下さった。この原稿は2018年12月中旬に受け取っている（会誌3号に掲載）。

この原稿を頂きにお宅に伺ったとき、先生が1965年にクーラン研究所から帰ると、翌年に工事開始が予定されていた新館建設の数学教室の責任者を任されて苦勞されたことを語って下さった。その後、数学教室の建物、現3号館の歴史を書き記した文章“数学教室の建物の変遷”をご寄稿下さった。

この記事の付記において、教室玄関の“数学教室”と書かれた銘板の文字は、教室最初の名誉教授であられた河合十太郎先生の手紙の中から採ったものであるとの貴重な事柄を教えて下さった。この銘板の文字は味わい深く、同窓会では既に表紙に用いさせてもらってきたこともあり、何方の手による書かは知りたいと兼ねがね思っていたことであった。もし楠先生がこの付記を書き残して下さらなかつたならば、数学教室玄関の銘板の由来は分からないままになったであろう。

3. 旧第3講義室を懐かしむ先生

教室中庭、特に枝垂れ桜を見て頂いたらとの提案が篠崎さんから出された。先生にご意向を伺うと“桜を見に行こう”と仰って下さった。2019年の3月最後の土曜日にと

計画を立てて、三木良一先生と一緒にお願いすることにした。例年だとこの頃が中庭の枝垂れ桜の見ごろなのだが、この年の3月下旬は寒い日が続き、当日も3月末としては寒く、かつ小雨が降っていた。中庭に面した廊下でお茶を飲んでいただいた。色々と思い出話をきかせてくださったが、旧第3講義室、現110講演室の中を見たいと言われ、入られると黒板のある演台側ではなく学生が座る席の方に座られて、随分と長い間懐かしそうに三木先生と二人で話されていた。楠先生にとって学生側の席に坐られたのは高々3年間、実質は1年一寸であろう、黒板のある演台側に立たれたのは何十年間であろう。しかし懐かしいのは学生時代に坐った席のようだった。旧第3講義室を出たときは、小雨も上がり日差しもあった。山桜の方は見ごろになっていたので、記念の写真を撮った。



2019年3月30日 中庭にて

これが切っ掛けで、先生にもう一枚絵を描いてもらい絵ハガキを作ろうとの案が出て、全く厚かましい限りであるが中庭の絵をお願いした。お願いしたときは既に新緑の頃であったが、先生は桜が満開の中庭の絵を描いて下さった。かくして計画通り教室の絵葉書セットを作ることが出来た。



思い出すままに書き出してみると、何んと次から次へと勝手なお願いをいたし続けたのを改めて知ることである。かくも次から次へとお願いを続けたことを、今度先生にお会いしたらお詫び申し上げねばならない。「君たちが次々と仕事を持ってきたので、命を大分縮めたよ」と応えられるだろう。それに対して更なるお詫びをどう申し上げればよいのか、今から準備しておかねばならない。